

# 私たちが実践する子どもへの火のつけ方

学校外で子どもと向き合う人たちに意欲の引き出し方を聞いた

## 大人との語り合いで人生の当事者精神を生み出す

ハタモク代表 與良昌浩さん



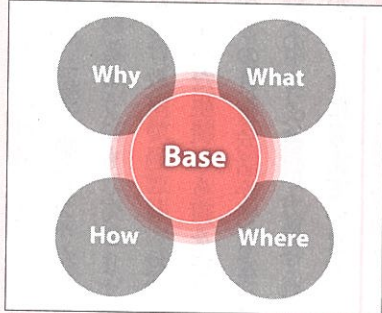
ハタモク代表 與良昌浩 自ら・まきひろ  
株式会社もくぎ代表取締役。伊藤忠商事、アクセンチュア、ユーエスエスなどを経て、現職。

### ◎安心できる雰囲気があれば内面を語り出す

私が代表を務める任意団体「ハタモク」は、学生・生徒が社会人と働くことの意義や目的を語り合う場づくりをしています。「ハタモク」のワークショップを中学校で行う場合には、生徒3〜4人のグループに大学生が社会人が1人ずつ加わり、働く目的や将来の夢などをテーマに語り合います。生徒たちは「自分は何がしたいのか」「なぜその職業に就きたいのか」などについて、私たち大人に自分の言葉で話してくれます。「中学生がそこまで考えているのか」と、驚くこともしばしばです。

「思春期の子どもが見ず知らずの大人に、そんな内面まで話すのだろうか」と思う方もいるでしょう。確かに始まる時は、初対面の大人を前にして身構えています。これでは打ち解けて語

図 ハタモクで使う4種類の質問



「ハタモク」では、生徒の「Base（なりたい自分）」を浮かび上がらせるために、「Why（なぜ）」「What（何を）」「Where（どこで）」「How（どのように）」の4種類の質問を用意。「何がしたいのかが分からない」と悩む生徒でも、複数の視点から問うことで目的を見い出せるという

り合えませんかから、まず大人が自分の悩みや失敗などを話し、生徒との距離を縮めます。最初に語り合う話題にも気を配り、「好きなアイドルは？」「得意な教科は？」など、答えやすいことを聞いてから、その理由を尋ねることもしています。たどたどしだったり、的外れだったりする返答にも、大人は熱心に耳を傾けます。

このような配慮により、生徒が安心して発言できる雰囲気グループ内に生まれます。これさえ出来れば、「どのような働き方、生き方がしたいか」といった内面に踏み込んだ問いに対しても、生徒は一生懸命に考えて話してくれるようになるのです。

### ◎なりたい自分を思い描くことで主体的になれる

将来、自分が何をするために、どのような方向に進みたいのか。こうした問題には答える人の数だけ正解がありますが、自分なりの答えを見付けることは簡単ではありません。私は30歳を過ぎてやっと見付けられましたし、見付けられないまま社会に出る人もいますでしょう。社会に出るまでの時間があるうちに、模範解答のない問題と向き合うことの楽しさを体感し、考える習慣を身に付けてほしいと、私たちは中学生を対象にした「ハタモク」も行いました。

生徒が日常的に考えるようになるためには、普段の語り掛けが最も大切だと思います。例えば、教科指導で正解を問うだけでなく、先生が

なぜその発問をしたのかを生徒に質問してみたいかがでしょうか。先生方は生徒が安心して発言できる雰囲気をつくっているはずですから、きつと活発に意見が飛び交うと思います。

先生方が1人ずつ生徒のグループに加わり、「ハタモク」のように語り合うことも、方法の1つだと思えます。または、グループを異学年混合にしてみても良いかもしれません。「ハタモク」で大人が生徒にしたように、先生や先輩が生徒の話を受け止めることが出来れば、有意義な話し合いになるでしょう。私の経験では、多様な大人と交流する方が、生徒の視野が広がり、考えも深まると感じています。保護者や地域住民といった学校外の大人に協力してもらい、生徒一人ひとりとじっくり話す機会が出来る、取り組みは更に充実するはずです。

なりたい自分像が見えてくれば、日々の学習や進路選択に対する生徒の気持ちも変わってくるはずです。周囲の価値観に左右されるのではなく、自分の価値観によって決められるようになると思えます。いわば、自分の人生に対する当事者精神が生まれるのです。たくさんの中学生と語り合う中で、彼らが主体的に判断し、行動するための力を十分に秘めていると、私は確信するようになりました。整える環境次第で、生徒が先生方の期待以上に力を伸ばすこともあ

るのではないのでしょうか。